

# イベントトピックス

## あさしお園卒退園

3月24日

卒園児8名(5名は別日)と10名の退園児があさしお園から飛び立ちました。支援学校や地域の小学校、幼稚園、保育所、子ども園で元気に明るくすごしてくださいね!  
入園式(4月2日) この春14名のあさしお園生を迎えました。あさしお園の生活に慣れて笑顔の花を咲かせてください!



## ザ・リッツ・カールトン大阪 クリスマスイベント

今年もザ・リッツ・カールトン大阪からクリスマスイベントのボランティアがありました。ケーキが振る舞われ、皆さん楽しく美味しく時間を過ごしました。



## 「コミュニティプログラム」

12月8日

### USJの社会貢献活動

(人気キャラクターやパフォーマー)による、小児病棟等のある病院や障害者施設、養護学校等への訪問により当センターへの来訪がありました。  
ご利用者、家族様とても楽しい時間を過ごしました。



## ふたば卒退園 3月22日

卒園児7名、退園児3名がふたばから巣立ちました。  
卒退園式では、これまでの楽しい思い出やそれぞれの成長を振り返る温かい時間となりました。4月からそれぞれの場所で元気に楽しく過ごしてくださいね。



# 感謝

【寄付金と寄付物品】

大阪発達総合療育センターへの御理解・御協力誠にありがとうございます

月	寄付者(敬称略)	物品名
12月分	廣江 惇朗	子供用車椅子 4台
	南田辺民生委員児童委員協議会	クリスマスプレゼント 55名
	東住吉区民生委員児童委員協議会 匿名	ボディソープ他 多数
1月分	12月分案基金 1件	DVD 12枚
	ダイセル労働組合本社支部	本
3月分	1月分案基金 38件	ぬいぐるみ 多数
	3月分案基金 3件	児童図書 多数

  

月	寄付者(敬称略)	物品名
12月分	大阪生命保険協会	子供用車椅子 4台
	株式会社万代	クリスマスプレゼント 55名
2月分	株式会社フェニックス	ボディソープ他 多数
	パイオニア労働組合児童用	DVD 12枚
3月分	OsakaBookOneProject児童用	本
	株式会社ユーエスジェイ	ぬいぐるみ 多数
12月分	一般社団法人日本出版クラブ	児童図書 多数
	寄付者(敬称略)	物品名
12月分	公益財団法人中央競馬馬主社会福祉財団	軽車両購入費一部助成(エアリワゴン)
	一般社団法人阪神馬主協会	

# 萃

大阪発達総合療育センター機関紙 第17号

社会福祉法人 愛徳福祉会

# 大阪発達総合療育センター

Osaka Developmental Rehabilitation Center

保険医療機関 南大阪小児リハビリテーション病院

特集: 第1回DSB基礎講習会

## ■ごあいさつ

社会福祉法人 愛徳福祉会 理事長  
梶浦 一郎



やっと寒かった冬も終わり、温かい春らしい日差しがやってきました。この冬にはインフルエンザが猛威をふるい、職員の何人も苦しんだようです。辛い入院児・者からは流行せず閉鎖になることは免れました。

世情は内・外ともますます殺伐としてきました。このような時こそ従来の日本の良い伝統を思い出し、いかしたいものです。「和を以て貴しとなす」の精神、自然からの学び、自然を敬う、温和な優しい心、これらを重んじれば世の中はもっと平和で心豊かな社会になることでしょう。プレーリーくんについてはまだまだ発展途上ですので、勉強していきたいものです。本年早々に第3回神経・筋疾患による脊柱変形に関する研究会を開催し、第1回DSB基礎講習会も行いました。大変な手間を職員の方々にはかけましたが、DSBを開発した私の責任とさせていただきます。

今年はDSBの基礎研究を積み重ね、更なる改良をしていきたいものです。

※DSB(Dynamic Spinal Brace: 動的脊柱装具) 愛称プレーリーくん

## ■特集に寄せて

大阪発達総合療育センター センター長  
鈴木 恒彦



桜が満開の季節を迎え、今年も職場に多くの新しい仲間参加を得ることが出来、喜びにたえません。当センターの基本運営方針である、保健・医療・福祉の緊密なチーム活動に加わっていただき、生活支援のための重要な一員として活躍を期待しています。昨年来、組織的活動を進めてきました法人内の「脊柱変形に関する研究会」は、全国に向けた研修会や勉強会を精力的に計画・実施してきました。これを支える部門として、また施設利用者様の補装具や自助具の相談窓口としてこの度、「義肢装具室」を開設しました。関係部署との連携を密にした義肢装具提供サービスの今後の質の向上を願っています。船戸副センター長を中心とする重症心身障がい療育支援サービスのニーズは現在ますます広がり、地域の障がい児在宅医療のための訪問診療・リハビリをはじめ、緊急時の相談等の事業化の方向に進みつつあるように思えます。これらを支える各専門職の実務的研修が今後求められ、研修会や勉強会への参加が予想されます。重症心身障害看護師研究会もこういった流れの中にあります。実務経験から学んだ多くのことを普遍化するために、各部門の奮闘を期待しています。

## 職員研修実施状況 H26年12月~H27年3月

当センターでは、質の高いチーム医療の提供をめざして、様々な職員研修を行い、技術の向上と知識の蓄積を図っております。

実施日時	企画部署	研修名	講師	参加人数	場所
平成26年12月8・10・11・15・16日 9:00~14:30	教育研修部	大阪市重症心身障がい児者地域生活支援センター事業 臨地研修	3・4階フェニックス師長・なでしこ 山口主任	39名	3・4階フェニックス なでしこ
平成26年12月11日(木) 17:40~18:40	経営会議	平成26年度知ってみようシリーズ「センターが生まれたころのおはなし、そして今から」	梶浦 一郎理事長	81名	5階ホール
平成26年12月17日(水) 17:40~18:40	経営会議	平成26年度知ってみようシリーズ「センターの家庭療育のおはなし、そして今から」	鈴木 恒彦センター長	91名	5階ホール
平成26年12月26日(金) 14:00~17:00	教育研修部	演題 ①ふたばのつなぐ支援 ~変えなかった母子保育~ ②おいしく楽しい栄養科をめざして...! ③保育所等訪問の取り組み ~子どものニーズに応じた保育所・学校への支援~ ④重度脳損傷児の下肢変形に対する早期整形外科的治療とリハビリテーションの経過 ⑤NICUからの在宅移行後支援病院としての役割と現状 ~医療相談室のコーディネート支援~ セイフティマネジメント委員会報告 ⑥「平成26年度インシデント報告」 講演 ⑦「重度障害児者が抱える口腔の問題」	①通園部ふたば 岡田桂子 ②運営局栄養科 栗山早紀、畑社祐、山下さつき ③あさしお園 小西礼子 ④リハビリテーション部理学療法科 木村智香 ⑤地域医療連携部医療相談室 近藤正子 ⑥医療技術部薬剤科長 高瀬時義 ⑦医療技術部歯科医 中村由貴子	203名	5階ホール
平成27年1月15日(木) 17:40~18:40	経営会議	平成26年度知ってみようシリーズ「船戸園長が考える、3年後のセンター」	船戸正久園長	84名	5階ホール
平成27年1月30日(金) 18:00~19:00	リハ部・看護部	生活場面に活かされるボバース・コンセプトの技術わかば事例から学ぶ「遊びの援助技術」	リハ部 須貝主任・田井副主任 わかば 安瀬主任	40名	PT室
平成27年2月4日(水) 17:40~19:00	教育研修部	発達障害児(者)と家族の支援	大阪大学医学系研究科保健学専攻 永井利三郎教授	114名 (外部参加20名)	5階ホール
平成27年2月18日(水) 17:40~18:40	経営会議	平成26年度知ってみようシリーズ「市村運営局長が語る、折れないこころ」	市村由美子運営局長	94名	5階ホール
平成27年2月27日(金) 18:00~19:00	リハ部・看護部	生活場面に活かされるボバース・コンセプトの技術なでしこ事例から学ぶ「立位を助ける技術と考え方」	リハ部 辻薫次長	43名	PT室
平成27年3月2日(月)~6日(金)	教育研修部	大阪大学医学部4年生実習	研修責任者 船戸園長 指導責任者 飯島医長	大阪大学医学部 4年生1名	訪問診療 3・4階フェニックス リハ部 なでしこ
平成27年3月9日(月)~13日(金)	教育研修部	関西医科大学医学部1年生地域医療実習	研修責任者 船戸園長 指導責任者 飯島医長	関西医科大学医学部 1年生3名	訪問看護ステーション 3・4階フェニックス リハ部 なでしこ
平成27年3月13日(金) 17:40~18:40	褥瘡管理委員会	褥瘡管理の基礎2	甲南女子大学 松田常美講師	36名	5階ホール
平成27年3月26日(木) 17:30~19:30	船戸園長	大阪の小児在宅医療を考える会サテライトシンポジウム 日米における中間施設の現状と展望 1)病院(NICU・小児病棟)からの在宅 2)療育施設における在宅移行支援 3)講演 「米国の在宅移行支援における中間施設の役割」	1)高槻病院副院長 南 宏尚氏 2)大阪発達総合療育センター 訪問診療科部長 和田 浩 3)Children's Recovery center of Northern California Medical director Dr.W.James Silva (全行程英語で進行 通訳なし)	61名 (外部参加22名)	5階ホール
平成27年3月23日(月)~25日(水)	教育研修部	関西医科大学医学部2年生実習	研修責任者 船戸園長 指導責任者 飯島医長	関西医科大学医学部 2年生1名	訪問診療 3・4階フェニックス リハ部 なでしこ



## 大阪発達総合療育センター

URL: http://osaka-drc.jp

発行者・社会福祉法人 愛徳福祉会  
発行責任者・梶浦 一郎

南大阪小児リハビリテーション病院(保険医療機関)  
フェニックス(医療型障がい児入所施設・療養介護事業・短期入所事業)  
主として重症心身障がい児者  
わかば(医療型障がい児入所施設)主として肢体不自由児  
ふたば(児童発達支援センター・保育所等訪問支援事業)主として肢体不自由児  
いぶき(特定相談支援事業・障がい児相談支援事業)  
なでしこ(生活介護事業・児童発達支援事業)

〒546-0035 東住吉区山坂5-11-21  
TEL:06-6699-8731 FAX:06-6699-8134

訪問看護ステーション めぐみ(指定訪問看護事業)  
TEL:06-6699-8855 FAX:06-6699-8856  
ヘルパーステーション めぐみ(指定訪問介護事業)  
TEL:06-7506-9223 FAX:06-6699-8856  
あおば(児童発達支援事業)重症心身障がい児  
TEL&FAX:06-7507-1277  
〒546-0035 東住吉区山坂5-9-16

大阪発達総合療育センター あさしお診療所(保険医療機関)  
あさしお園(児童発達支援センター・保育所等訪問支援事業・障がい児相談支援事業)主として肢体不自由児  
ゆうなぎ園(児童発達支援センター・保育所等訪問支援事業・障がい児相談支援事業)主として難聴児  
〒552-0004 港区夕風2-5-3  
TEL:06-6574-2521 FAX:06-6574-2524





## “第1回DSB基礎講習会”を開催いたしました

総務課係長 寺裏 庸加



2015年1月17日(土)、18日(日)“第1回DSB基礎講習会”が開催されました。参加者は医師15名、義肢装具士20名の合計35名。北は札幌や岩手、南は福岡や愛媛からお越し頂きました。この“DSB基礎講習会”は昨年の12月初めに急きょ決定され、告知開始から開催日まで約1カ月あまりと日にちが迫っているにも関わらず、僅か2週間余りで定員に達し受付をお断りするほどで、DSBが各地域で使用され広まっていることを実感させられました。このDSBの作製方法については以前からお問い合わせがあり、その都度梶浦理事長の側弯外来を見学頂いたり(原則医師と装具士が同伴来院)、装具士の方は工場で作成実習を行っておりました。しかしこの短時間ではなかなかお伝えしきれないのが現状であり、当面の課題でした。

ところが、2014年2月22日「第1回神経・筋疾患による脊柱変形に関する研究会」が発足されると、これをきっかけにDSB基礎講習会の必要性が重要視され始め、そして今回急きょ開催されることになりました。

DSB基礎講習会はまず、①障がい児治療に携わっておられる先生方(主治医)と、②その指示、処方のもとと製作にあたる義肢装具士を対象としています。講習会1日目は医師・装具士が合同で講義を受け(一部実習)、2日目は装具士だけで製作実習を行います。講習会修了後には参加者全員に修了証書が手渡されますが、装具士は帰っ

てから今回学んだ知識を基にDSBを製作し、レントゲン等基礎資料と共にセンターへ提出します。梶浦理事長と鈴木義肢装具の梶谷さんはその装具と資料をもとに審査し、コメントを付けて「DSB製作技術取得証書」を発行致します。今回受講された先生方から「医師・装具士と一緒に研修する機会がなかったのが新鮮だった」「実際に採型する所が見れて良かった」などが寄せられ、装具士からも「採型の様子がわかり、実習ができて良かった」「これからも講習会を続けて欲しい」など多くの方が好意的な感想を寄せられました。中には「もう少し症例の難しいパターンを教えてほしい」「次回はレベルアップした内容を入れてほしい」など、次に繋がる大変嬉しい言葉も頂きました。今後はDSB基礎講習会修了者、DSB製作技術取得者をプレーリーくんのホームページで公開すると共に、多くの方



にDSBについて知って頂けるよう情報発信を行ってまいります。そして、もし次回開催することが出来れば、さらに充実した会になるよう、微力ですがしっかりとサポートしていきたいです。

## 第3回 神経・筋疾患による脊柱変形に関する研究会



平成27年2月28日第3回神経・筋疾患による脊柱変形に関する研究会が開催されました。

本研究会は「症候性側弯症に対する治療について研究する」という目的で平成26年2月に第1回研究会が開催されました。

側弯症に対する治療は大きく2つに分けられ、手術等による外科的治療と、装具、理学療法等による保存治療です。本研究会では毎回いずれかの治療法に携わられている先生を講師に招き、数々の症例検討を発表頂いています。これは研究会設立当初からの梶浦理事長の思いである「症候性側弯症にはどの治療法が最善なのかを参加者全員で考えてほしい」という事が反映されています。

研究会に先立ち開催された世話人会では、本研究会の関係者が日本側弯症学会(以下側弯学会とする)の下部委員会として招かれている事について活発な議論がなされました。

ある世話人の先生からは外科的治療を中心に議論されている側弯学会に対し保存治療を全面に打ちだし正面から勝負したらよい、という強気な意見を出される先生も居れば、側弯学会とは住み分けて、保存治療に関する唯一の研究会として側弯学会と並列の関係になることがこの研究会の一つのゴールではないか?という先生もいらっしゃいました。

いずれにしても梶浦理事長が考案したDSB(動的脊柱装具)「プレーリーくん」が側弯症に対する保存治療の一つとして認知され始めたという事を世話人会の先生全員が認識していると感じました。

続いて行われた研究会についての報告をします。

参加者は合計40名(整形外科27名、小児科7名、リハ科3名、その他3名)まずは指定演題として4題各発表15分+質疑応答5分の持ち時間で発表されました。兵庫県立リハビリテーション西播磨病院長の金澤先生、札幌医大の土岐先生、秋田県立医療療育センターの三沢先生

経営企画室 室長 梶浦 正



が、現在在院で処方しているDSBに関する小経験を中心に発表頂き、その後大阪医大の藤原先生が保存治療における歴史を数回に分けて今後発表されることを前提にパート1を発表頂きました。

閉会後のアンケートにも「他の施設でのDSBの活用の話が聞けて良かった。」「歴史については引き続き聞きたい。」等、概ね好評を頂きました。

その後休憩をはさんで、教育講演として滋賀県立小児保健医療センターの二見先生の外科的治療の現状を講演頂きました。「手術に際しては執刀する医師だけではなく、術前を管理する小児科医、また術中の状態管理を行う麻酔医、そして術後回復を促す為のリハ医全てが協力して初めて一人の患者の手術が出来るのです」という話は非常に印象的で、この手術による外科的治療の困難さを物語っていると感じました。

終了後のアンケートでは「手術治療について今まで触れる事が無かったので、良い経験になった。」「非常にわかりやすく参考になりました。」等こちらについても概ね良好な意見が殆どでした。

その他全体を通しての意見としては「症例の殆どが脳性麻痺なので、筋ジストロフィーの症例に対するアプローチも聞いてみたい。」「側弯症がまだきつくなる前の乳幼児に対する理学療法を含めた保存治療に関する講義を聞きたい。」等、まだまだ議論するネタは尽きないと感じました。

またDSB基礎講習会を受講頂いた先生方が今後処方された事例を発表する場としても本研究会の活用の場は広がると思いますし、前述の通り日本側弯学会の下部委員会に組み入れられればますます大がかりな研究会に発展する可能性もあります。そうなっても事務局としては、今までの経験を生かして今後も運営をしっかり行っていきたいと思っています。

## 義肢装具室の開設

義肢装具室 室長

尾崎 和仁



2015年1月より開設しました義肢装具室をご紹介します。

義肢装具士の多くは民間の義肢装具会社に所属しますが、社会福祉法人で義肢装具室が設けられている病院は国内では非常に稀な事です。その為、今後のモデルケースになる意識をし、あらゆる分野から興味を持っていただける部署になる様に努めます。

現在おもに行っている業務は①装具診での技術応援②側弯X線測定とデータ入力③病棟やリハ部からの補装具調整や修理の対応です。まだまだ業務量が少ないですが、今後は「思い付いたらすぐに行動」に移せる部署を作り仕事の質と量を増やしていきます。

近年、児童(18歳未満)の補装具作り変えの対応年数も厳しくジャッジされる事が増えてきています。その為、新規製作時にはドクターの意見と患者様の希望を形にした製品を義肢装具会社は納めて行かなくてはなりません。当センターではプレーリー診と装具診を補装具判定

## ●認定重症心身障害看護師研修会の概要●



手術室師長 1期生 土井 知栄子

重症心身障がい看護の世界において、専門的な知識と技術を持った看護師を育てることは長年の課題でした。この研修会はそのような背景から、日本重症心身障害福祉協会近畿地区連絡協議会が平成23年に設立し、大阪・京都・和歌山・滋賀・奈良・兵庫県の重心施設で働く看護師経験5年以上、重心施設勤務経験3年以上の看護師を対象に実施し、総修了者がすでに75名となりました。

この研修の特徴は7ヶ月の期間に毎月1週間づつの講義の会場を4施設持ち回りで開催し、多くの重心施設を見学することができます。また、講師陣は総勢約50名、びわこ学園高谷清先生、小川勝彦先生、当法人の船戸正久園長、ベルデさかい児玉和夫先生、愛徳整肢園下山田洋三先生、京都大学大学院鈴木真知子教授、大阪府看護協会の伊藤ヒロコ会長等々、今後再現できないほど多彩な、それぞれの領域の第一人者の講義を一堂に聞くことができます。受講生としてまたとない学習の機会を有意義に活かしたいと思います。

訪問看護ステーションに移動 在宅移行への支援を通じて母への理解を深める



訪問看護ステーション 1期生 南 智子

研修会の講義や実習によりさまざまな知識や技術をより深く学び、自分の看護観を変える経験となりました。特に訪問看護の実習では、在宅で過ごす患者さんを目の前に病棟看護師として「病院で過ごしている姿」にしか目がむいていなかったことに気が付きました。研修終了後1年で訪問看護ステーションに異動となり、病棟で関わっていたAちゃんの退院が決まり、病院から在宅に移行するという貴重な場面に関わりました。在宅で見せる母の顔や自宅で過ごすAちゃんの姿は別人に見えることがあり母の心理的変化の意味することを考えるようになりました。また、それを証明するべく看護研究をすすめました。母の発言をじっくりと考え、理論に照らし合わせて考えることは「子供が障がいを持つということ」の深さや、生活の中で見過ごしやすい母の“SOS”に気づける目に繋がっていることを確信できました。今後も母の気持ちに寄り添い、一緒に考え、家族皆が安心して生活できるように支援していきたいと思ひます。認定研修を受講した看護師として更に看護の技を磨き、病院と在宅をつなげる役割を果たしたいと思ひています。

看護方式の検討



4Fフェニックス主任 2期生 内山 環

この研修を通じて、重症心身障がい児者の特有な老化現象、生活習慣病の発症と予防、看取りの看護を学び、あらためてフェニックスの看護を考える機会となりました。また、他施設の見学で「PNS(ハート・シブ・ナック)方式」を取り入れた病棟を見学し非常に影響を受けました。見学病棟は介護度が高い職場で安全なケアを提供するためにこの看護方式を導入していましたが、スタッフ2人でケアを進めていく様子にフェニックスで生かせる!!と、直感、現在、勤務病棟でこの看護方式に取り組み中です。病棟の課題は、看護職員の定着と看護レベルの統一と向上ですが、スタッフが2人体制で協力し合うことで指導的効果とケアの安全、聞きやすさは、離職防止効果につながると信じています。多職種が働く重心病棟にあった運営の仕方を検討し、入所者の生活の向上を目指したいと考えています。

ドクターと義肢装具会社で行っていますが、今後自分たちも同席し義肢装具会社へ完成する製品のイメージを伝え、採型指導・技術指導を行いレベルの高い補装具を患者様が利用されるように努めます。

また、センター内では一人の患者様に対応する医療スタッフの一員として加わり連携を取り、各自がしっかりと提案・発言し患者様と補装具のインターフェイスの役割を果たし、サービスの向上に努めていきたいと思ひます。また、3名の専門性から、それぞれの「研究」「開発」「研修」を中長期的に計画していきたいと思ひます。

当センターの梶浦理事長が発案されたDSB(プレーリーくん)は国内の病院ドクターや義肢装具会社に認知されてきました。1月にはDSB基礎講習会も開催され全国各地から集まっただき、改めて注目度を実感しました。私も以前からDSBには大変興味を持っていましたが採型・設計・組立・適合の一貫した作業を早く身に付け、DSBに対応しやすい簡易型座位保持装置など展開させていきたいと思ひます。

最後に義肢装具室3名の紹介をします。尾崎和仁…(義肢装具士)小児装具・CVD装具・補装具全般の採型・適合・調整

松居篤史…(シーティングエンジニア)座位保持装置・バギー・車いす 上野剛士…(木工技術士)木工製品の設計・作成・修理

各自得意(専門)分野が有り経験豊富なメンバーです。3名とも決して若くは無いですがやる気満々でいます。ご相談やご質問があればお気軽に声をかけてください。今後ともよろしくお祈りします。

生き生きと働ける楽しい職場づくり



4Fフェニックス主任 3期生 増田 恭子

研修を終えて、講師の方々の障がい児への思いが伝わってきて、重症児者の思いをくみ取りながら、苦しい事や楽しいことをともに感じあえる関係を大切に、ひとり一人がいずれ迎える最後の日まで、看護で関わり続けていきたいと、改めて強く感じました。研修で出会った他施設の人たちや、一緒に働くスタッフの悩みや思いを共有しやりがいにつながる看護を続けていくために、こころの余裕がもてる環境づくりに役に立ちたいです。現在は修了生同士の交流会や研究会に参加して、研修終了後の職場で果たす役割を明確にしていきたいと考えています。

触れるケア



わかば病棟主任 4期生 松本 久美

障がい児者は動作をするときや訴えるときなど、異常な運動パターンや緊張が出現します。その積み重ねが側弯や変形など悪影響を及ぼします。また、言葉のやり取りが難しい障がい児者にとって触れることはひとつのコミュニケーション手段として、触った感覚、触られた感覚を大切にすることで、職員の識別、安心、手の心地よさ、気持ちの良いポイントを共有できると考えています。そこで私はもっと「触れるケア」を提唱したいと思ひます。手を通じて訴えを理解し緊張を軽減できるよう追究し、そしてわかば病棟の肢体不自由児が自分の体を感じさまざまな経験を重ねていけるよう関わっていかうと考えています。また、学んだことを活かし観察力やアセスメント力、情報を発信・共有できるような伝える力の向上に努めたいと思ひます。